

「然るべき環境」の視点で構築する 教育の情報化が定着する学校づくり

平野 修（松阪市立三雲中学校）

概要：総務省の「フューチャースクール推進事業」と文部科学省の「学びのイノベーション事業」の実証校として、全校生徒が1人1台のタブレット端末を利用することができる環境が整って6年が経過した。恵まれた環境ではあるが、全国の実践校が証明するように、機器環境が整うこととICT機器の活用が進むことはイコールではない。また、毎年、教員の異動による分掌変更があり担当が入れ替わるが、現在でも日頃の授業や教育活動の中でICT機器が活用され続けている。本校がこれまでの研究体制づくりで重視してきた「然るべき環境」という視点で、教育の情報化の定着に向けてどのような取組を進めてきたのか、具体的な事例から報告する。

キーワード：教育の情報化，定着，1人1台

1 はじめに

本校は、平成23年より教育の情報化の実践校として、ICT機器を活用した授業実践を行っている。しかし、これまでの体験からすると、機器が整備されるだけでは全教員がICT機器を活用した授業実践を行うようにはならない。そこで、本校に赴任する前にICT機器を活用するにあたって抱えていた不安と、その経過をA群（「解消した(又は『なかった』)」「少し解消した」とB群（「少し不安がある」「不安は増している」）に分け、その記述内容と現在のICT機器の使用頻度から、教育の情報化を推進するにあたって、教職員が日常的にICT機器を利用するに至るために、基本的なベースとして必要とされる環境づくりについてまとめる。

2 研究の方法

(1) 目的

本校で勤務するにあたって抱いていたICT機器の活用についての不安が、その解消された程度とその理由、現在の使用頻度を照らし合わせながら、教育の情報化を推進する学校において、その初期の段階で必要とされる利用環境について考察を行う。

(2) 調査対象

本校の教員

(3) 調査時期

平成29年7月

(4) 調査方法

質問紙調査と自由記述

(5) 質問項目

1-1 赴任前の不安とその内容について

「赴任前、ICT機器を活用するにあたって不安はありませんでしたか？」（「ある」「ない」）

「それはどのような不安でしたか？」（自由記述）

1-2 不安の解消度合とその理由について

「現在、その不安の内容はどうなっていますか？」（「不安は解消した」「少し不安が解消した」

「まだ少し不安がある」「不安は増している」）

「その理由を教えてください。」（自由記述）

1-3 ICT機器の使用頻度について

「普段の授業の中でICT機器をどれくらいの頻度で活用していますか？」（「ほぼ毎時間」「一単元に数回」「あまりつかわない」）※全職員が公開授業を行っているため「まったくつかわない」という選択肢を設けていない。

3 結果

1-1 赴任前の不安とその内容について

赴任前から不安があったとする教員が9割近くで圧倒的に多く、内容としては指導者としての自分が機器を十分に使いこなせるのかという点についての不安を感じている。

- ・タブレットを使ったことがない自分が、授業で活用できるか不安であった。
- ・有効活用できるのか。操作は覚えられるか。

1-2 不安の解消とその理由について

現在、その不安が解消される傾向にあるA群は全体の2/3強で、その理由からはICT機器を道具として受け入れることができた様子が伺われる。

- ・何ができるか、少しずつ分かってきたから。
- ・充分ではないが、できる範囲で使っていくと思えるようになったから。
- ・ツールとして使うという認識ができたから。

うまく解消されていないB群は1/3弱で、その理由からはICT機器を使いこなせていないという思いと不安を抱えながら活用することへの負担感が伺われる。

- ・使いこなせていない。
- ・活用できていないから。
- ・ICTを使った公開授業や研修など、ときに非常に負担になる。

1-3 ICT機器の使用頻度について

不安が解消される傾向にあるA群は「ほぼ毎時間」または「一単元に数回」の頻度で、授業にICT機器を使用していると回答しており、B群は「一単元に数回」または「あまりつかわない」と回答している。また、1-2で「まだ少し不安がある」と回答したものの中には、「使い方や可能性や、効果的な活用方法など、どこまでいってもゴールがないから。今の自分の使い方が間違っていないか、これでいいのか不安な毎日。」にあるように、より効果的な活用を模索するが上での不安を抱えているものもある。

4 考察

ICT機器を使いこなせるのだろうか不安

を抱いていた教員は「自分なりにできる範囲の使い方」で「道具としてのICT機器」を利用しようと受け止めることができると不安が解消される方向に向かい、ICT機器を利用するようになる。抱えている不安を内容別に分けると「使えるのか」「どうやって使うのか」「何のために使うのか」の三段階となる。「使えるのか」の段階の不安が解消しないと使用頻度が低くなり、「どうやって使うのか」「何のために使うのか」に対する不安が解消され、この段階で取組んでいる教員は使用頻度が高くなっている。

5 結論

初期の段階に抱く「使えるのか」に対する不安を解消するためには、教員が学校生活の中で日常的にICT機器に触れるような環境をつくることが重要である。そして、その試みは学校運営上または教育推進上必要だから行われる「然るべき環境」でなくてはならない。本校がこの視点を体制にしながらいってきた実践の内から、3例を示す。

○「校内ブログを利用した連絡事項の共有」

職員が利用するPCから記事を投稿し、PCやタブレットで閲覧するシステムを導入し、毎朝の打合せ会議で伝えきれない詳細な情報を補填する。

○「共有アプリを利用した会議の資料提供」

毎月の職員会議や校内研修会の際に使用する資料をPDFにして共有アプリで提示し、カラー表示や拡大確認ができるようにする。

○「画面共有機能を利用した掲示通知」

職員室に電子黒板とホワイトボードを設置し、それぞれの特性を生かした掲示連絡を日常的に行い、効果的な活用を促す。

6 今後の課題

本来ならば【使う環境】→【使い方】→【使う目的】の順に底上げをしてきたい所であるが、抱えている悩みのレベルが異なる集団に対する支援の方法を管理職と研究推進部が共に検討しながら今後も進めていく必要がある。